

外国人非集住地域における フィリピン女性ネットワーク

——分断をもたらす噂に着目して——

大野 恵 理

本論文は外国人非集住地域におけるカトリック教会において、外国人支援部門を結節点として形成されたフィリピン女性ネットワークが分断される局面に着目し、その背景をジェンダー視点により検討した。教会の外国人支援部門には、性的搾取やドメスティック・バイオレンス（Domestic Violence:DV）被害、在留資格の問題などの移住女性特有のジェンダー化された相談が多く寄せられ、日本人女性が長年にわたりフィリピン女性の困難を受け止めてきた。教会は女性たちにとって緊急避難場所や生活を再建するための包括的支援セクターとして極めて重要な役割を果たしてきたが、近年フィリピン女性が教会で噂をする行為が原因となり、教会に来なくなる現象が起きていた。本論文ではこれをネットワークが変容し分断される局面ととらえ、その噂をする行為の背景について調査協力者のインタビューデータから分析した。その結果、噂はフィリピン女性が地方（農村）社会における「外国人花嫁」であるという構造的な制約のなかで、地域社会から期待されるジェンダー規範を強く内面化していたことにより、互いを評価付けするようになったために生じ、拡散されたことが分かった。ネットワーク分断の背景に着目することで見えてきたことは、強固にジェンダー化された社会構造のなかで生きなければならないという、地方（農村）社会に住むフィリピン女性たちのリアリティであった。

キーワード：フィリピン女性、カトリック教会の移住女性支援、噂を交わす行為、
エスニック・ネットワーク、外国人非集住地域

I. 問題の所在と課題の設定

Breton (1964) によるとエスニックな宗教組織は、移民の精神的支柱となるだけでなく、移民の活動や組織化を促し、移民が移住先の社会に適応するために大きな影響を与えたとした。しかし日本のニューカマー研究においては、これまで宗教との関連に着目した研究は限定的であった（石井 2003: 福田 2012: 三浦 2015）。石井（前掲書 :38-39）では、移民が移住先社会で生活する上で移住者同士のネットワークは重要であり、宗教的な場のコミュニティやネットワーク形成

における教会の機能を考察される必要があるとし、研究の重要性が指摘されている。そのような中、三浦（前掲書）はニューカマーのフィリピン女性が、教会に通うことで教会を起点としたエスニック・ネットワークを形成し、そこで蓄積された社会関係資本を教育資源として、子育ての場面で戦略的に活用していたことを明らかにした。すなわち従来の研究において、カトリック教会は精神的支柱でありながら、ネットワークがつくり出される場所であり、それにより移住先社会での生活を支える空間であるとされてきたのだ。一方坪田（2013,2018）は、上記とは別の側面から教会をとらえている。宮城県のカトリック教会におけるフィリピン女性ネットワークに着目し、教会を「結節点」にネットワークが形成されながらも、それが分断されていく過程を読み解いている。東日本大震災後、それまで分散して暮らしてきたフィリピン女性たちが教会の支援活動のもとに集まりだし、教会を「結節点」としたフィリピン女性ネットワークが形成され、タガログ語のミサが実現したり、女性間での「夜の仕事」の就労斡旋が行われたりしながら拡大していった。しかし「夜の仕事」に就く女性たちの増加によりミサの参加者が減少し、ミサの実施が困難になったことや「復興」の過程で次第に「昼の仕事」に復帰する女性たちが増えたことにより、ミサの実施をめぐって「エンターテイナー」に対するステレオタイプが表明されるようになった。結局このステレオタイプは水面下でコミュニティを分断する「不可視の境界線」（坪田2013:104）となり、フィリピン女性たちは分断されてしまったという。震災をともに乗り越えたという地域社会のローカルなコンテクストが作用し、「夜の仕事」に対するステレオタイプは表出こそしないものの、ネットワークを分断させる力を持っていたのである。このように教会が必ずしも常に移民にとって安定的な基盤を提供しているわけではなく、しばしばネットワークやコミュニティを分断させる舞台ともなりうるという坪田の指摘は示唆に富んでおり、本論文でも教会を起点とするエスニック・ネットワークに対する上記の批判的視点を共有し、分析をすすめたい。しかしながら坪田の分析では、「フィリピン女性＝水商売」（2018:94）という地域社会の偏見を指摘しながらも、女性たちが置かれている社会的な文脈を「ローカルなコンテクスト」（同上）と説明するのみで、そこに含まれる偏見や差別、ジェンダー構造への目配りが不足している。

そこで本論文では、ジェンダー視点により、外国人非集住地域のカトリック教会における外国人支援を結節点としたネットワーク形成と変容について検討する。具体的には、そのネットワークの分断に着目し、その背景を地域社会のジェンダー構造をふまえて議論していく。

本論文が対象とする教会では、参加する外国人のなかでフィリピン女性が多くを占めているため、フィリピン女性に注目する。フィリピン女性は、他の移住女

性と同様に、日本社会では外国人であり、且つ女性であるという複数の要素によって周縁化されやすいと言われている。山岸(2012)は「移住女性が抱える複合的な課題」とは、「外国人ゆえ、あるいは女性ゆえと言った単一の要因がもたらすのではなく、社会やジェンダーに起因する課題が絡みながら引き起こす問題として捉えるべきである」と指摘している。つまり移住女性は移住先の社会的構造の下で、エスニシティやジェンダーといった複数の社会的カテゴリーによって差別・抑圧され、周縁化されやすい。したがって、移住女性がどのような社会的構造に置かれているかを明らかにし、彼女たちがどのような社会的不平等にさらされているかを解明するには、ジェンダー視点による分析が意義を持つと考える。以上から本論文では、ジェンダー視点により、教会のフィリピン女性ネットワークを分析していく。

II. 調査地と教会の概要

まず調査地のA市は、新潟県南西部に位置している人口約20万人の地方都市¹⁾である。A市の外国人住民の特徴は、人口が全体の1パーセント未満と極めて少数である点と、性をみると女性が男性に比べて2倍以上多い点である。国籍は中国が最も多く、フィリピンは第2位である。ただしフィリピン出身者の在留資格に注目すると、「永住者」、「永住者の配偶者」、「日本人の配偶者」、「定住者」の合計が約9割(86.7%)を占めており、A市においてフィリピン人住民は長年定住傾向にあることがわかる²⁾。

次にA市における教会関連の施設を概観すると、市内にはカトリック教会は2か所あり、市街地にカトリックB教会(以下、B教会とする)、郊外にカトリックC教会(以下、C教会とする)がある。B教会とC教会は同じ教区に位置しており、C教会では毎週日曜日の日本人信者を対象としたミサのほかにも、ほぼ毎月隔週の日曜日午後にはタガログ語・英語によるミサが行われている。一方B教会では毎週日曜日に日本語によるミサが行われており、現在はC教会のようなタガログ語・英語によるミサは行われていないものの、タガログ語・英語で書かれた週報が配布されている。実際には2つの教会のどちらにも参加する女性は多く、B教会で行われる日本語によるミサに参加した女性が、C教会のタガログ語・英語ミサに参加することは珍しいことではない。またB教会の敷地内には、保育施設、母子生活支援施設、老人保健施設などの教会の福祉施設が建てられており、こうした施設はフィリピン女性の就労先の一つともなっている。

本論文では、B教会が長年にわたりフィリピン女性の生活支援を行ってきたことから、B教会に絞って分析することとする。ただし既述の通り、フィリピン女

性はB教会とC教会のどちらにも積極的に参加している女性が多いため、フィリピン女性のネットワークというときはどちらの教会にも参加している女性も含めることとする。

Ⅲ. 調査方法・対象

2016年10月から2019年1月にかけて断続的に複数回B教会等にてフィールド調査やインタビュー調査を行い、本論文はこの調査内容の分析結果に基づくものである。調査はスノーボール式に協力を依頼し、教会の外国人支援部門担当の日本人女性近藤氏（仮名）及びフィリピン女性（10名）に対し、1対1または1対複数人の半構造化インタビューを実施した。具体的には教会にて調査を6回行い、ミサやイベントへの参加及びインタビュー調査を実施した。

それぞれの調査協力者と調査について簡潔に説明する。近藤氏はキリスト教信者ではないが、B教会の神父（当時）からの依頼により、教会の外国人支援部門にて10年以上活動した日本人女性である（詳細は次節で述べる）。インタビュー調査は教会の事務室等にて計4回行い、B教会による支援の経緯と内容、フィリピン女性との関係性等について質問した。一方フィリピン女性らはすべてキリスト教信者であり、日本人又は日系人男性との婚姻経験をもつ女性たちである。インタビュー調査は教会やフィリピン料理店、彼女らの自宅等にてそれぞれ1～2回行い、職業や友人関係、教会とのつながりなどの日常生活に関する質問をし、回答してもらった³⁾。なお調査地におけるジェンダー規範について説明するため、補足的に教会関係者以外の地域住民のインタビューデータも使用する。

Ⅳ. カトリックB教会におけるフィリピン女性への支援とネットワーク形成

1. フィリピン女性への支援の概要

B教会におけるフィリピン女性への支援は、在日外国人支援に熱心だった外国人神父らによって開始された。1990年代に在住外国人信者を対象とした多言語ミサが開始され、2000年代初頭には外国人支援部門と日本語教室⁴⁾を含む「国際部」が設置された。既述の近藤氏はもともと市役所の女性相談窓口での勤務経験があり、神父に伴われたフィリピン女性の相談対応を担当した経緯から、神父からの依頼により外国人支援部門を担当することになったという。外国人支援部門は多言語が堪能だった神父と日本人女性近藤氏の連携によって運営されることとなった。相談は相談者の母語に合わせ多言語によって行われたため、徐々に外国人に教会の支援情報が共有されるようになり、南米日系人（ブラジル、ペルー）

及びフィリピン女性からの相談が増加したという⁵⁾。では、フィリピン女性からは具体的にどのような相談が寄せられたのだろうか。近藤氏によると、主に「エンターテイナー」として働く女性及び日本人男性と結婚した女性から、性的搾取(違法な性的サービスの強要、移動の制限など)に関する相談、オーバーステイなどの在留資格に関連するもの、家庭問題(嫁姑問題、ドメスティック・バイオレンス Domestic Violence :DV を含む)、子どもたちの教育についての相談が多くあったという。また2005年の入管法改正により興行ビザでの入国が厳格化され、新たにA市にやってくる「エンターテイナー」女性が増減した頃からは、在留資格の変更や日本人男性との結婚の相談、フィリピンの家族呼び寄せに関する相談が増加した。このような相談に対し、外国人支援部門では相談内容の聞き取りと対応、書類作成などの実務的なレベルの支援だけでなく、公的機関にともに出向き、必要な手続きのサポートが行われたという。では実際にどのような相談対応が行われたのだろうか。次節では具体的な事例をみていこう。

2. ジェンダー化された困難への理解と支援

2000年代初頭に外国人支援部門を始めた当初は、興行ビザで働くエンターテイナーの女性がB教会に駆け込んでくるが多かったという。

プロモーターにパスポートをとられたとか、それで逃げてきた。そういう人がみんなオーバーステイだったの。ならざるをえないの。それで当初の約束と違うとか、「パスポートとられた」、「牢屋に入れられた」、その次に「裸踊りをさせられた」とかね。そうするとやっぱり(契約とは)違うでしょ。昔、非常に多いときは母子生活支援施設で一時保護をやりました⁶⁾。

() 内筆者補足(以下同じ)

女性たちはパスポートを取り上げられ身体的に拘束されたり性的に搾取されたりしたため、B教会に助けを求めた。エンターテイナーの女性たちにとって、B教会は緊急避難のためのシェルター役割を果たしており、近藤氏はそのような女性たちを母子生活支援施設を使って一時的に保護し、安全な居場所を確保していた。

また日本人男性と結婚したフィリピン女性たちが夫から激しいDVを受け、B教会に保護を求めてくることもあった。近藤氏は女性を保護した後、警察や市役所への通報やDVを報告したり女性につき添ったりしながら、公的手続きの面から女性を支援した。

DV とかはちゃんと報告しなくちゃいけないでしょ。それと必要であれば、警察が市役所とかに通報して話しますので。そういうのは全部やらないとダメですよ。ひどいケースは警察に付き添っていく。生活保護もらいたいかありましたので、市役所にも一緒に行くね。やっぱり付き添わないと一人じゃ絶対に無理でしょ。日本のシステム知らないし、どこに行ってもいいか知らないし。それは必ずやります。

南野（2017）は、移住女性が言葉・文化上のハンディを抱え情報資源のアクセスが困難であるため、暴力被害に対して脆弱化されてしまうと指摘したが、まさにB教会のフィリピン女性はそうした状況に陥っていたといえる。元エンターテイナーで日本人男性と結婚したりサは、夫から暴力的なDVを受け、「血まみれの状態」で子どもとともにB教会に駆け込んだという。まさに「極限の状態」（山岸 2009）で助けを求めた後、母子ともにB教会の施設で保護された。その後B教会の支援により夫と離婚し、母子生活支援施設に入居することができ、さらにB教会から斡旋された保育施設で調理員として再就職を果たしたという。外国人支援部門ではこのような脆弱化されたフィリピン女性を受け止め保護し、女性の社会的復帰を物心両面から支援してきた。

B教会が支援したフィリピン女性のケースは、外国人でありかつ女性であるという複合的な要因によって生じた困難であった。それに対し、女性相談員の経験を持ち、対応できる知識を有していた近藤氏は、それらの特性を理解した上で、日常的な生活で発生する様々なレベルのトラブルを受け止め、対処してきたことが分かった。また外国人非集住地域であるA市には、一部の外国人集住都市のように、DV被害や様々な人権侵害に苦しむ移住女性たちを保護する組織団体⁷⁾はなかったため、B教会は最も身近なシェルターとなったのである。

3. フィリピン女性のネットワーク形成

B教会に寄せられた様々な相談に対する細やかな対応によって、フィリピン女性のネットワークは拡大していった。まず既述のリサのように、カトリック信者であるフィリピン女性にとって宗教的な信頼をよせる教会は、困難を抱えたときに最もアクセスしやすい支援セクターであったと考えられる。またそれに加え、近藤氏によれば、教会の支援実績が教会の外ですでに形成されていたフィリピン女性コミュニティで共有されたことが大きい。あるフィリピン女性が超過滞在状態で相談に訪れ、B教会の支援により在留資格を取ることに成功したという情報が、その女性の友人や知り合いに拡散されたことにより、徐々に教会に来るフィリピン女性が増えていったという。また普段はB教会に来ていない女性も、B

教会に通う女性を通じて、近藤氏に相談を寄せるようになった。さらに日本語が得意ではない女性が、通訳として日本語の堪能なフィリピン女性を連れてくるなどし、徐々に外国人支援部門を介したB教会のフィリピン女性ネットワークは拡がりを見せていった。つまりB教会の外に既に広がっていたフィリピン女性の個人的なネットワークが、B教会の外国人支援部門を一つの結節点として再編され、新たなネットワークが結ばれ拡大したのだ。

B教会に参加するフィリピン女性は、日本人男性もしくは南米出身日系人男性と結婚している女性、または結婚していたがすでに離婚した女性が大半を占めている⁸⁾。次第にB教会内で様々な活動を行う女性信者グループの「クララ会」(仮名)への入会と、近年ではヴァーチャルな空間に広がるネットワークの形成がみられるようになった。「クララ会」ではミサに参加している女性を中心となり組織され、宗教的な行事の運営や進行、季節行事への参加が行われている。またB教会及びC教会の中心メンバーの女性が、ソーシャル・ネットワーク・サービス(=SNS)を使ってタガログ語・英語ミサの情報を拡散し、ミサ後のランチ会の開催などを行っている。特にミサに関しては、事前にミサの日時が教会の写真付きで掲載され、ミサ後には当日配布された週報や神父の言葉とともに、参加者による集合写真が載せられるなどし、ほぼ毎週のように情報拡散が行われている。

このようにB教会のフィリピン女性ネットワークは、外国人支援部門を結節点として拡張したネットワークが基盤となり、教会への宗教的な信頼や実践、SNSの普及によりゆるやかなネットワークを維持してきたといえる。

V. 教会を離れる女性たち—フィリピン女性ネットワークの変容

前節までの検討により、B教会では外国人支援部門を起点とした教会への参加を前提としたネットワークが形成されており、そこは外国人非集住地域に暮らすフィリピン女性にとって重要な支援拠点であったことが明らかになった。しかし近藤氏によれば、近年B教会に参加するフィリピン女性が減少する現象が起きているという。調査からは外国人支援部門の縮小といった体制変化も一因であることが分かったが、主要な要因はネットワーク内部の変化であることが明らかになった。

1. ネットワーク内部の変化—噂をする行為

B教会への参加者の減少の一つの要因として、近藤氏はネットワーク内部の要因があると述べた。それはフィリピン女性同士で噂をする行為であり、それを避けようとする警戒心があるという。

みんな教会だから来やすいんだと思ってたんだけど、今問題になっているのは、フィリピン人が教会に多いから、噂になるから嫌だという人もいること。教会に行くと、「あの人がどうして来たのかしら？」となって噂が広まる。まさに今抱えている問題はそれなの。

近藤氏はカトリック教徒であるフィリピン女性にとって、これまでB教会は気軽に立ち寄りやすい場所だと考えていたが、同時に「噂になるから嫌だ」と思う場所ともなると述べ、フィリピン女性間での認識が変わってきていると言及した。つまりフィリピン女性にとっては、B教会に行くことで何か事情を抱えていることを想起させ、ネットワーク内で好ましくない噂が発生し、それが拡散してしまうことを恐れ、B教会を避けるようになっていくという。

近藤氏によればフィリピン女性コミュニティの中では、噂は日常的に交わされているものであり、その様子を「一人歩きして止まらないもの」と例えた。そうした噂は日本人男性との結婚や結婚生活の継続、日本人男性配偶者の経済的状況という観点から発生するという。

豊かな日本人と結婚すれば豊かな生活が送れているし。離婚した人も多いから離婚したグループもある。あと日本人と結婚してもあんまり豊かでない人もいるし。やっぱりそれぞれの思惑とか経済的な格差で、噂があるような気がする。（下線筆者）

言い換えればフィリピン女性コミュニティの中では女性自身ではなく、日本人男性との婚姻や経済状況という価値基準によって、噂が生まれる背景があるという。つまり地域社会で暮らすフィリピン女性たちは、日本人男性との婚姻や経済的状況に極めて依存する形で規定されているのである。ただしこれらはいくまでも近藤氏の推察によるもので、近藤氏自身のフィリピン女性に対する偏見が内在している可能性も否定できない。次項では、実際にフィリピン女性たちが具体的にどのような噂を立てられネットワークを離れたのかについて、彼女らの語りから考察していく。

2. 「教会をやめる」——エライザ、シェリー、ティナのケース

噂をする行為により、実際にネットワークを離れたと語ったのは、エライザ、シェリー、ティナ（すべて仮名）の3名であった。彼らはどのような噂によって教会を離れたのだろうか。

エライザ及びシェリーは、かつてB教会のミサに参加していたことがあったが、今では参加していない。彼女らは宗教的な実践の場である教会内で、フィリピン女性たちが噂をする行為に対し、極めて批判的であった。

エライザ：みんなカトリック教会に行ってるじゃないですか。私あんまり行きたくない。どうしてかっていうと、フィリピン人みんなおしゃべりじゃない？。ミサなのにしゃべってばっかりして。(神父の説教が)聞こえないの⁹⁾。

シェリー：教会にはいかない。なんでって、これは変な話だけど、神父さんしゃべってるのに、みんな他の人ことをしゃべってる。だからここは祈る場所じゃないなと思って。教会は私の祈りをするところ、神様に「ありがとう」するところだから。そういう教会にはあんまり(行かなくてもいい)なと思って¹⁰⁾。

(下線筆者)

彼女たちは、ミサの最中にも関わらず神父の説教を聞かずに、他の女性たちについての噂話やおしゃべりに興じるフィリピン女性の態度をみて、宗教的に不真面目なふるまいだと批判し、「そういう教会にはあんまり(行かなくてもいい)」と思うようになったという。B教会への参加を取りやめ、「しゃべってばっかり」なフィリピン女性のネットワークを離れたのである。たしかに筆者が参与観察したタガログ語・英語のミサにおいても、神父の説教中にもかかわらず、後方の座席で複数の女性たちが話しつづけていることがあった。それに対し他の参加者は彼らを注意することもなく、神父の説教もそのまま続けられ¹¹⁾、このようなミサへの参加態度は常態化していることがうかがえた。エライザとシェリーはこうした参加態度を問題視し、教会への参加をやめたのである。このように教会における宗教的に不真面目なふるまいは、間接的に教会への参加をとりやめる理由となりうるが、果たして他者の態度のみが原因となるのだろうか。他方ティナ(仮名)は、実際に噂的的となってしまったことで、教会を離れたという。彼女はかつてフィリピンクラブでホステスとして働いていたが、店で出会った資産家の日本人男性と結婚後、そのことがきっかけとなり他のフィリピン女性から激しい嫉妬にあい、ネットワーク内で根拠のない噂話を流されたという。周囲からみれば、安定的な在留資格を得られる上に経済的な余裕と社会的な地位を有していた日本人男性との結婚は、まさに「豊かな生活」の獲得ととらえられていた。ところが実際には彼女は、夫から生活費や食費など一切渡されない経済的DVや行動の

監視・暴力的な言葉による心理的な DV も受けており、それとはかけ離れた生活をしていたという。

他の（フィリピン）人は、みんな何も知らずに噂話ばかりする。夫が金持ちだからとか嫉妬もあるし。だから付き合いたくない。私はそういう（噂を流す）人たちとは違う。絶対一緒にいない。真面目なフィリピン人とだけ付き合うようにしてる¹²⁾。

（下線筆者）

彼女の結婚生活は、実態としては破たんしていたにもかかわらず、「夫が金持ち」だと嫉妬され、裕福な生活を送っているという噂話を流され、激しく中傷されたという。現在工場で働きながら、夫に秘密裏にフィリピンクラブで「ヘルプ」（パートタイム労働）としても働いているが、精神的にも大きなダメージを負ってさえている。

ティナをめぐる噂の内容に注目すると、まさに近藤氏が推測したように、日本人男性との婚姻や経済的状况という価値基準によって噂がたてられていたことが分かる。また彼女は、噂話を流すフィリピン女性たちと「そういう人たちとは違う」と自らとの明確な差異化を強く主張した。今では「教会をやめる」ことで、フィリピン女性ネットワークを離れ、ごく少数の「真面目な」フィリピン女性たちとのみ付き合っている。こうした帰結からは、日本人男性との婚姻や経済的状况によって噂がたてられ、これらの価値基準によってコミュニティ内で女性同士が評価付けしあい、同時にそれへの反発によってネットワーク内から女性が排除されていくという噂のもつ排他的な力が明らかとなった。

このように教会に参加するフィリピン女性の減少には、フィリピン女性ネットワーク内部の要因、すなわち噂をする行為が背景にあることが浮かび上がった。他の女性のミサへの不真面目な参加態度といった表面的な理由だけではなく、実際はネットワーク内で噂を交わすことで他の女性たちを評価づけし、自らと差異化するという行為によって、女性がネットワークから離れていくことでもあった。フィリピン女性たちが教会への参加をやめ、ネットワークから離れていった経緯からは、教会を結節点とした同国人女性のネットワークが噂により変容し、分断されていく様子がわかる。互いを批判し合い、分断をもたらす噂が生まれてしまう背景には何があるのだろうか。次節ではこれまでのフィールドデータをもとにしながら、フィリピン女性たちによる同国人女性間での評価付けが、地域社会のジェンダー構造に深く根差したものであることを明らかにしていく。

VI. 地域社会のジェンダー構造と移住女性： 規範の参照軸化がもたらすネットワークの分断

1. 移住女性が地域社会のジェンダー規範を参照軸とするのはなぜか

フィリピン女性の間で噂をする行為について Faier (2009) は、噂をすることはコミュニティ内部の行為基準を成立させていくものと指摘している。すなわちフィリピン女性は、日本人家族や地域住民から常に向けられる偏見を敏感に感じ取り、日本人家族のもとから「逃亡」したフィリピン女性について批判的に話題にする（噂を交わす）ことによって、地域社会の中でフィリピン女性としてどのように振る舞うか、家族や地域住民とどのような関係性を築くのか、いい「お嫁さん」としてどのような存在であるべきかを様々に交渉し調整している行為であるという (Faier 前掲書:202.6)。つまりフィリピン女性同士で噂をする行為は、地域社会のジェンダー規範と密接に結びつき、彼女らが地域社会の中でどう生きていくかを方向付ける行為であるといえる。では A 市におけるジェンダー規範とはどのようなもので、それがフィリピン女性の噂をする行為とどのように深く関わっているのだろうか。

まず筆者が行った地域住民に対するインタビュー調査から、地域社会のジェンダー規範を探っていきたい。ある地域住民は、フィリピン女性について「金が目的で、日本人の男と結婚する」という経済的な目的が先行するイメージを語った¹³⁾。また「フィリピン人でしょ、クラブとかでホステスで働いてるでしょ」、「あの子どものお母さんは水商売しているから、子どものこと関心がないの。(中略)フィリピンの人ってこうなのよね」¹⁴⁾とフィリピン女性を性産業に結び付けながら、そこに従事する女性に対する偏見を隠さず、「母」としてあるべき姿ではないと断定的に語る者もいた。このように調査地である A 市においては、彼女たちは常に「フィリピン女性」として一括りにして語られ、エスニシティとジェンダーによる複合的な差別にさらされていた。フィリピン女性自身もこうした差別を認識し、シェリーは「元夫の妹たち (から)、いじめられた。フィリピンへのイメージが悪いからね」、「フィリピン人は、お金お金ばっかりと思われている」と日常的に差別が表出していることを明らかにした。このような偏見は「息子が (フィリピン女性を) 連れてきても、家には入れないという女性もいる」¹⁵⁾という極端な意見につながり、この地域にはフィリピン女性に対する極めて排他的で強力なスティグマが存在しているといえる。

同時に「母」として性産業に従事することはふさわしくないというジェンダー規範も明確に存在していた。それは「妻」である女性に対しても適応されるもので、ある日本人男性はクラブで働くフィリピン女性がともにいる空間において、

筆者に「(女性が) 結婚したんなら、旦那はこんな仕事やめさせるべきだよ」と話し、「こんな仕事」であるホステスは、旦那である日本人男性が辞めさせるべき、「妻」にはふさわしくない仕事だと表現していた¹⁶⁾。またフィリピンクラブで働く女性たちは「一緒になったら、クラブの仕事をやめるようになって夫に言われた」(シェリー) や、「ヘルプで入っていることは夫には内緒で、いないときだけ(働いている)」(ティナ) だと話しており、彼女たちは夫の言動を通して地域社会のこうした偏見を認識していたといえる。すなわち「母」や「妻」である女性に期待されるジェンダー規範は、地域社会の中でフィリピン女性によっても共有されており、B教会の多くのフィリピン女性が日本人男性と結婚していることを考慮すると、こうした規範は日常的なレベルで浸透していると考えられる。

賽漢卓娜(2018)は、移住女性たちが地方(農村)社会における「外国人花嫁」であるということについて、「嫁」である女性たちは日本人男性家族を通じて、地域社会及び国家において「正当な場所を確保」(2018 :236) されていると指摘している。しかしこの「正当な場所」を確保されていることこそが、逆に彼女たちを地域社会におけるジェンダー規範に強固に縛り付けていき、またそこからひとたび逸脱するような行為(水商売で働くなど)に対する強い批判を生み出していくのである。この地域で暮らす多くのフィリピン女性が地方(農村)社会の「外国人花嫁」であることを考えると、女性たちがいかに強固なジェンダー構造の下に置かれやすく、またその規範を内面化せざるをえないような状況にあるのかが理解できる。

また経済的な側面においては、賽漢卓娜(前掲書 :236) は日本人夫を通じて「間接的」に収入を得ることができるとしている。しかし筆者の調査では、日本人夫たちの職業は必ずしも高収入とはいえず、さらに自営業や無職のケースもあり、収入が不安定であることが分かった。調査では、協力者の日本人夫のほとんどが正社員ではなくパートタイム労働であり、さらには一時期失業している者もいた。夫の働く業種は製造業、介護施設(送迎バス運転手)、宿泊施設(調理)、自営業等¹⁷⁾であった。それでもたしかに夫が働いていれば「間接的」に収入を得ることは可能であるが、夫がすでに定年退職をむかえていたり病気療養していたりするため、女性らがまさに家計の大黒柱とならなければならないケースもある。フィリピン女性の経済活動に着目すると、筆者の調査協力者9名全員がパートタイム労働であり、業務遂行に当たり日本語による意思伝達が重視されない職場で働く傾向があった。業種別ではフィリピンクラブ、食品工場のライン、宿泊施設、調理スタッフ(給食、食品スーパー)、製造業、縫製工場、農業関連団体(協同組合)、その他自営業(農業、英語講師)¹⁸⁾において働いていた。時給は800円(新潟県最低賃金は803円;2019年7月現在)¹⁹⁾から2,000円程度であり、収入

は決して多いとはいえない。そのため夫の収入がなければ、生活は困難になることは容易に想像がつくだろう。特に工場のラインや調理スタッフ、農業では言語的障壁は低く、食品工場につとめるローラは「フィリピン人がいっぱいいるから、フィリピンの言葉だけで（仕事が）できる」²⁰⁾ 仕事内容であるが、時給は最低賃金レベルである。移住女性にとってこれらの仕事への就業のハードルは低いものの、日本人社員からは「日本語で話せと怒られる」といい、差別的な態度をとられることもある排他的な空間ともなっている。また9名のうち4名が、一か所だけでは十分な収入が得られないため、二か所以上を掛け持ちし働いていた。その仕事として最も多く選択されていたのは、フィリピンクラブの「ヘルプ」であった。調査地のフィリピンクラブでは、興行ビザが厳格化されて以降、いわゆる「エンターテイナー」を雇用することが難しくなったため、それに代わる形で日本人男性との結婚により以前から地域に居住していたフィリピン女性たちが多く働くようになった。筆者の調査したフィリピンクラブでは、ホステスのほぼ全員が結婚移住女性であり²¹⁾、よく通っていたフィリピン料理店で声をかけられ働くことになったという女性や子どもたち同士が同じ小学校に通っているという女性たちもいた。彼女たちのほとんどが他にも仕事をもっているがその収入は多くないため、「ここのお金は本当に助かる」（ジェシカ）と話していた。実際にクラブでは他業種に比べ時給が2,000円と高く、さらに客からの指名料、イベント、「同伴」等によって金額はあげることができるという。ただし、あくまでパートタイム労働の収入では家計を担えるほどの十分な収入ではないため、夫の収入にも頼るほかない状況に置かれている。必ずしも調査地のすべてのフィリピン女性とその夫が、このような厳しい経済状況に置かれているわけではないが、そうであるがゆえに、こうした経済状況はフィリピン女性間の経済格差となって表れ、同国人コミュニティにおける階層差の拡大や嫉妬感情の表出につながりやすいのである。

上記のような制約に加えて、前述したような「外国人」である彼女たちの法的な立場が持つ脆弱性が加わる。たとえば家庭内のDV等によって生活が破たんしてしまえば「配偶者」という安定した在留資格も、急激に不安定になってしまう。もちろん夫から逃れ離婚した場合でも、日本人の子どもを養育する「母」として「定住者」の在留資格を得ることは可能だが、それでも多くの場合、経済的な困難を伴うものとなる。だからこそ日本人男性との婚姻関係と良好な関係の維持は、在留資格の面でも経済的な面においても、日本における安定的な生活のために、フィリピン女性たちにとって必要なものと強く認識され重視されているのである。

このように調査地に暮らす移住女性の、在留資格や経済的な状況を合わせた安定的な生活は、社会的にも制度的にも、日本人男性に強く依存せざるをえない構造となっているといえる。それゆえにその「安定」を失わないために、彼女たち

は「嫁」や「妻」、「母」役割をことさら強く引き受けざるをえない状況に置かれているのである。こうした構造のもとでは、同じ移住女性同士であっても、ジェンダー規範から逸脱している女性は、格好の噂的とされ厳しく糾弾され、ネットワークから排除される。また日本人夫も含めた家族間で経済的な格差がある場合は、それが深刻な階層差となって表れやすく、経済的に豊かな（にみえる）女性への嫉妬感情が生まれやすい。結果として、同国人女性ネットワークにおいて、互いに地域社会のジェンダー規範を強固な参照軸とした差異化のまなごしをぶつけあい、それが嫉妬と重なってネットワークから特定の女性たちを退出させる要因となっていくのだ。すなわちB教会におけるフィリピン女性たちのネットワークの分断をもたらしたのは、彼女たちの間での噂そのものではなく、彼女たちを強固にとりまく地域社会におけるジェンダー規範と、移住女性の生活の安定を日本人男性との結婚生活においてのみ保障するような日本の在留管理制度であった、と言えるのである。

Ⅶ. 結びにかえて

本論文では外国人非集住地域のカトリック教会における、フィリピン女性に対する支援から生まれた移住女性のネットワークが分断する原因となった、女性たちの噂をする行為について、その背景を明らかにしてきた。

B教会には周縁化され脆弱化されたフィリピン女性から様々な相談が寄せられ、支援担当者の近藤氏は移住女性に特有の複合的な文脈を理解しながら、支援を行ってきた。それは一時しのぎ的な対応ではなく、地域社会の中で自立し生活を再建するための包括的な支援であった。こうした支援が教会で行われたことにより、教会を起点に連鎖的にフィリピン女性が集まり、教会外のパーソナルなつながりが、教会を結節点としたネットワークとして新たに再編されていったことが分かった。しかし近年になり、フィリピン女性が教会に来なくなる現象が起きていた。本論文ではこれをネットワークが分断される局面ととらえ、その要因を女性たちが交わす噂に着目し検討した。その結果、まず地域社会におけるフィリピン女性に対するエスニシティとジェンダーの複合的な差別や地方（農村）社会の「外国人花嫁」であることによる様々な構造的制約の文脈が、彼女たちの噂をする行為に強い影響を与えていたことがわかった。日本人夫に社会的にも制度的にも依存しなければ「安定」した生活が実現しないという構造的制約の下、地域社会のジェンダー規範はフィリピン女性に内面化され、それが女性同士の評価に直結するようになった。もちろん一人ひとりの女性たちの経験をみれば、経済的に自立している女性はおり、必ずしも生活すべてを日本人夫に依存している人ば

かりではない。移住女性がまさに大黒柱となり、日本人家族や子どもたちとの生活を支えている事例も報告されている(李 2017)。またフィリピンクラブで働き、上記のような差別や偏見を認識しながらも、それに抵抗しようとする女性もいる。ホステスとして長年働くレアーナは「私の仕事がだれかに迷惑をかけてる？ そうじゃない限り、私は続けるわ」²²⁾と語り、ホステスの仕事への誇りをのぞかせた。またジェシカは「そんなの気にしなくなった。だって、『あんたたちが私の生活の面倒みてくれるの？』って思うようになったから」²³⁾と差別的なまなざしに屈しないという主体的な抵抗をみせている。しかしこのような女性たちの姿は、コミュニティの中では容易に見過ごされ、噂であっても共有されることはない。コミュニティの中での噂は、フィリピン女性にとって日常的なものであるが、それは単にゴシップ的に交わされるものではなく、互いに評価し合い、差異化の作用を持つ社会的行為であったということが明らかになった。こうして教会を結節点としたネットワークは、日本人支援者との関わりにおいては移住社会への適応を促す場所であった一方、移住女性間では、言ってみれば彼女たちが地域社会に適応すればするほど強く参照し、内面化していくジェンダー規範に基づいた、嫉妬や排他的な態度が表出する空間に変貌し、その結果としてネットワーク自体が分断されていくという事実も見えてきた。移民にとってネットワークの結節点であり、移住先社会で被るさまざまな差別や暴力からのシェルターでもあった教会という場が、皮肉にも移住先社会のジェンダー規範を強く内面化せざるを得ない移住女性たち同士の距離を遠ざけてしまう場にもなってしまったのだ。このことは逆説的に、「外国人花嫁」として暮らす非集住地域の移住女性たちの置かれる強固にジェンダー化された社会環境のリアリティを、知らしめるものではないだろうか。

(おおの えり フェリス女学院大学博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 (DC))

謝辞：調査に協力してくださった方々及び貴重なご助言をいただいた査読者の先生方に心より感謝申し上げます。なお本稿は、JSPS 特別研究員奨励費（課題番号 18J11413）「外国人散在地域における結婚移住女性の『定住』戦略の実証的研究」による研究成果の一部である。

[注]

- 1) A市統計要覧「1章 土地・自然」（平成29年度版）。なお、本論文では調査地の匿名化のため地名を伏せている。
- 2) 「A市 外国人登録者数 国籍別・在留資格別外国人市民数（平成28年）」（A市国際交流協会による提供）。なお、本論文では調査地の匿名化のため地名を伏せている。
- 3) インタビュー終了後も、必要な場合はフォローアップ調査として、直接またはテキストメッセージによる追加質問を実施した。インタビュー記録は事前に許可を得て録音し、後日文字起こしをした。なおフィリピン女性の名前やB教会の女性グループの名称は、プライバシー保護のためすべて仮名である。

表1 フィリピン女性のプロフィール（すべて調査当時）

協力者名 (すべて仮名)	年齢	入国時の ビザ	現在の 滞在状況	日本人との 婚姻状況	仕事	配偶者の仕事 (下線は正社員)
リサ	40代	エンター テイナー	定住者	結婚 (日系人)	調理スタッフ (給食)	製造業
エライザ	40代	エンター テイナー	定住者	事実婚	調理スタッフ（食 品スーパー）、 フィリピンクラブ	製造業
シェリー	50代	配偶者	帰化	結婚	製造業	自営業
ティナ	30代	エンター テイナー	配偶者	結婚	食品工場、 フィリピンクラブ	無職
ローラ	40代	配偶者	定住者	結婚	食品工場、 宿泊施設	介護施設 (送迎スタッフ)
レアーナ	40代	エンター テイナー	定住者	結婚→離婚	フィリピンクラブ	—
ジェシカ	50代	観光	定住者	結婚	自営業(英語講師)、 フィリピンクラブ	失業中→介護施 設(送迎スタッ フ)
マリア	50代	配偶者	帰化	結婚	農業関連団体	定年退職後病気 療養中
ビアンカ	50代	配偶者	帰化	結婚	縫製工場	定年退職後自営 業(農業)
ジョアンナ	30代	観光	配偶者	結婚	宿泊施設	宿泊施設

※プライバシー保護のために考察に影響が出ない範囲でプロフィールの一部を変更している。

- 4) 匿名化のため、厳密には実際の部門名とは異なっている。
- 5) 最大で年間約600件（延べ）の相談に対応した。（近藤氏への聞き取りより。2017年5月）。2009年のリーマンショック時にはA市でも多くの日系人が失業したが、B教会は会社との交渉や問い合わせを手伝うなどの支援を行っている。（D新聞朝刊12頁「カトリックB教会失業ベルー人駆け込み」（2009年1月21日）、D新聞朝刊14頁「失業日系人へ食料をカトリックB教会寄付呼び掛け」（2009年12月15日）なお、匿名化のために正確な新聞社名および記事の表題は伏せている。
- 6) 近藤氏へのインタビュー調査より（2017年5月）。以下、注のない限り、近藤氏の語りの引用は同日のものである。
- 7) 外国人が集住する一部の都市では、性暴力やDV被害にあった移住女性を対象とした保護活動が行われている（平野（小原）2003）。また困難を抱えたフィリピン女性たちに対し、相互扶助活動などを通してエンパワメントを促す自助団体が作られている（カラカサン・反差別国際運動日本委員会編2006;山岸2012;小ヶ谷2018）。

- 8) なお近年、A市では製造業に従事する技能実習生が急増し、独身のフィリピン女性実習生もわずかに参加するようになったが、B教会ネットワークに参加している様子は見られない。
- 9) エライザへのインタビュー調査より (2017年10月)
- 10) シェリーへのインタビュー調査より (2018年4月)
- 11) カトリックC教会のタガログ語・英語ミサにおける参与観察フィールドワークメモより (2016年12月)。
- 12) ティナへのインタビュー調査より (2018年4月)
- 13) 地域住民男性への聞き取り調査より (2017年4月)
- 14) A市国際交流協会における参与観察フィールドワークメモより (2017年2月)
- 15) 近藤氏へのインタビュー調査より。近藤氏の支援ケースの一つで、相談場においてフィリピン女性を息子の結婚相手として認めなかった、日本人女性の言動の説明より引用した。
- 16) 地域住民の男性とフィリピン女性との食事会における参与観察フィールドワークメモより (2018年4月)。
- 17) それぞれの内訳は、製造業2名、介護施設2名、宿泊施設1名、自営業1名であり、その他無職が1名、定年退職後病気療養中が1名、定年退職後自営業が1名であった。
- 18) それぞれの内訳は、フィリピンクラブ4名、食品工場2名、宿泊施設2名、調理スタッフ2名、製造業1名、縫製工場1名、農業関連団体1名、その他自営業1名である。なお掛け持ちしている仕事をすべて含めている。
- 19) 厚生労働省新潟労働局ホームページより
https://jsite.mhlw.go.jp/niigata-roudoukyoku/hourei_seido_tetsuzuki/tingin_kanairoudou/chingin.html#01 (最終アクセス2019年7月8日)
- 20) ローラへのインタビュー調査より (2017年6月)。
- 21) フィリピンクラブ「Mayumi」(仮名)におけるフィールドワークより (2018年10月)。
- 22) レアーナへのインタビュー調査より (2018年11月)。
- 23) ジェシカへのインタビュー調査より (2018年11月)。なお、ジェシカはキリスト教信者ではあるが、現在はカトリックではなく、プロテスタント系の教会に通っている。そのため、B教会及びC教会には参加していない。

[引用文献]

- Breton, Raymond 1964 Institutional Completeness of Ethnic Communities and the Personal Relations of Immigrants, *American Journal of Sociology*, 70-2:193-205
- Faier, Lieba 2009 *Intimate Encounters –Filipina Women and the Remaking of Rural Japan*, University of California Press Berkeley and Los Angeles, California
- 福田友子 2012『トランスナショナルなパキスタン人移民の社会的世界——移住労働者から移民企業家へ』福村出版
- 平野(小原)裕子 2003「定住外国人の健康問題と保健・医療・福祉」駒井洋監修・石井由香編著『移民の居住と生活』明石書店、90-132
- 石井由香 2003「移民の居住と生活——現状と展望」駒井洋監修・石井由香編著『移民の居住と生活』明石書店、20-55
- カラカサン——移住女性のためのエンパワメントセンター反差別国際運動日本委員会 (IMADR-JC) 2006『移住女性が切り拓くエンパワメントの道——DVを受けたフィリピン女性が語る』解放出版社

- 李善姬 2017「東北の日韓国際結婚家庭と多文化の子どもたち——母語, アイデンティ, 文化間移動をめぐって」佐竹真明・金愛慶編著『国際結婚と多文化共生——多文化家族の支援にむけて』明石書店, 93-141
- 南野奈津子 2017「移住外国人女性における生活構造の脆弱性に関する研究——子育ての担い手としての立場に焦点をあてて——」『学苑・人間社会学部紀要』(昭和女子大学近代文化研究所) 916:61-74
- 三浦綾希子 2015『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ——第二世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房
- 小ヶ谷千穂 2018「結婚移住女性と地域社会 (1) 都市型結婚」移民政策学会設立 10 周年記念論集刊行委員会編著『移民政策のフロンティア——日本の歩みと課題を問い直す』明石書店, 229-233
- 賽漢卓娜 2018「結婚移住女性と地域社会 (2) 地方(農村)の結婚移住女性」移民政策学会設立 10 周年記念論集刊行委員会編『移民政策のフロンティア——日本の歩みと課題を問い直す』明石書店, 234-238
- 坪田光平 2013「フィリピン系結婚移民とエスニック教会——『エンターテイナー』をめぐる価値意識に着目して——」『社会学年報』(東北社会学会) 42:97-106
- 2018『外国人非集住地域のエスニック・コミュニティと多文化教育実践——フィリピン系ニューカマー親子のエスノグラフィー』東北大学出版会
- 山岸素子 2009「移住女性に対する DV の現状と NGO の取り組み——DV 法と移住女性, 当事者女性のエンパワメント」(財) アジア・太平洋人権情報センター (ヒューライツ大阪)『女性の人権の視点から見る国際結婚』現代人文社, 78-85
- 2012「移住女性が直面する複合的な課題——地域における支援とネットワーク活動の現場から」ヒューライツ大阪『国際人権ひろば』105
<https://www.hurights.or.jp/archives/newsletter/section3/2012/09/post-185.html> (2019 年 7 月 9 日最終アクセス)

A Filipina Women’s Network in a Catholic Church in Rural Japan: How Gossip Divided a Women’s Network

ONO Eri

(Ferris University, JSPS Research Fellow)

This article aims to reveal, from the perspective of gender studies, how a Filipina women’s network in a Catholic church in rural Japan has been changed by gossip. A Japanese social worker with the church helped Filipina women who were fleeing domestic violence and sexual abuse, conditions that are connected to migrant women’s living conditions in Japan. The social worker has a strong understanding of the migrant Filipina women’s context and provides comprehensive support for rebuilding their lives in local society. However, the Filipinas gradually stopped going to the church because of gossip rooted in their economic condition and gendered norms in the local context. According to an interview analysis, we determined that gender norms and the gendered structure surrounding “rural brides” in the local community were the reasons for the gossip. The Filipinas women recognized the gendered norms and structures, internalized them, and evaluated each other based on these norms. Thus, such gossip turned them not only away from the church, but also from their Filipina women’s network. It is obvious that the gossip changed the network. Through this context, we can better understand these women who are living under the highly gendered structures of rural Japan.

Keywords: Filipina Women, Catholic Church Social Activities for Migrant Women, Gossip, Ethnic Network, Rural Area,